

◆ 第2回「武家の古都・鎌倉」国際フォーラム ◆

基調講演「鎌倉の遺産保護において市民がやれること」

西村幸夫さんは、東京大学先端科学技術研究センター教授です。鎌倉の世界遺産登録活動に対し、常に的確なアドバイスを頂いています。今回は、鎌倉市民の役割を主題にして、若宮大路を中心に、高野山や京都の例などをお話しいただきました。



講師／
西村幸夫さん

鎌倉は山に沿った歴史的な寺院だけではなく、現代の都市である。市民がどのように取り組むべきかを考えてみたい。鎌倉では、京都の大極殿に替わって中心に神社を置いた。それは政権の正統性の証明である。周辺の緑に囲まれてよく神聖が保たれた防衛的な構造であり、新しい都市の形であった。

鎌倉の中心である鶴岡八幡宮の背後にある山は、開発の危機にさらされてきたが、それを止めたのは、御谷騒動といわれる市民の力である。1960年代前半当時、山を守る法的な手立てはなにもなかった。1964年(昭和39年)、裏山の緑を含めて八幡宮であるという見方から、市民はブルドーザーを阻止し、募金をして土地

を買い取るなどの運動を起こした。この運動は、京都・奈良など全国に及んでいった。それを契機に1966年(昭和41年)、古都保存法が成立した。市民の運動が法律まで作った最初の例である。御谷を守ったこの運動は鎌倉風致保存会として現在に至っている。

1973年(昭和48年)、都市緑地保全法が成立。2004年に改正されて都市緑地法になる。景観法ができた同じ国会での改正である。緑を守る運動はさらに街の景観を守る方向へ発展する。1995年(平成7年)の鎌倉市景観条例が成立。建物の高さやデザインなどの制限をし、それを市内の広い地域に広げた例はあまりない。

他にもっと徹底している世界遺産の街がある。高野山の門前町では、長年にわたる努力が続けられてきたが、今年になって景観条例を作り、指定された景観地区では、建物は和風で一定の深さを持った廂を設け、高さを制限するなど、細かなルールを作って、世界遺産にふさわしい街並みの景観を作り出している。

京都は盆地の景色が特色であり、その象徴としての五山の送り火が、市内の重要な40か所近くの地点から見えるように、それぞれの地点から放射状の規制空間を設け、500メートルの範囲で、建物の高さを制限し、近代的な建物にも様々な規制をしている。

鎌倉の場合も歴史的な建造物との調和に取り組む必要があり、それが歴史的価値を高めることになる。

第2回「武家の古都・鎌倉」国際会議

国内外専門家へ感謝を込めて

フェアウェル

パーティー開催

8月2日(日)、国際会議の最終日程として、鎌倉市内で「武家の古都・鎌倉」の世界遺産登録に向けたフェアウェルパーティーが開催されました。外国からの主賓3名は前回より一歩進んだ好意的な挨拶をされました。養老孟司推進協議会会長は「我々人類の遺産を調べる、元々アフリカから人類が生まれ、3度ほかの大陸に渡り3種類の遺伝子に分かれていることがわかっています。アフリカ、中東、インドなどを通じてアジアの端にある日本に遺伝子は渡ってきました。日本人は世界で唯一、この3種類の遺伝子をすべて引き継いでいる人種です」と話し、人類学的にも興味深い挨拶をされました。



流鏑馬稽古を披露

になればと、回し木馬を用いての流鏑馬(やぶさめ)稽古が披露されました。小笠原流三十一世宗家から流鏑馬の歴史や衣装などの紹介があり、鎌倉時代の武士の狩装束に身を包んだ小笠原清基さんが精神統一して矢を手にする、華やかなパーティーの雰囲気が一瞬で緊迫しました。見事に的が射抜かれると、流鏑馬の迫力に外国の主賓の方々も拍手喝采でした。

世界遺産登録に向けて勢が増した第2回国際会議の締めくくりにふさわしく盛り上がったパーティーになりました。



◆ 第2回「武家の古都・鎌倉」国際フォーラム ◆

パネルディスカッション 「鎌倉を守り伝えるために」

第2回国際フォーラムのパネルディスカッションでは、推薦書作成を前提にした議論が行われ、「山と町」「武家文化」などに焦点があてられました。第1回でも同じ話題が取り上げられましたが、それだけ鎌倉にとって重要なものだともいえるでしょう。コーディネーターは国士舘大学イラク古代文化研究所教授の岡田保良さん。議論の要旨を紹介します。

岡田 イコモス委員として日本各地の世界遺産候補地の会議や他国の候補地の予備的審査にかかわっています。今回は寺社史跡を視察の上、すでにつめた議論を重ねてきました。締めくくりとして専門の立場からアドバイスをいただき、改めて印象付けられた点、新しい発見などについてお話いただきたい。

●山と町

ル・ズー 第1回とは別の候補地を見て、鎌倉は伝統、文化の多様性ということでもとても重要だと思いました。今回は特に周辺地域そして都市計画の重要性を知りました。有益な議論を通して、鎌倉の「顕著な普遍的価値」を見つけることができると思います。禅文化、禅寺院がどのように新しい様式に代わっていったのか。推薦文書を作っていくに当たって、今後の課題となるでしょう。構成資産の絞り込みとか、たくさんの資産をどのように保存、管理していくかということも今後の課題です。政府や関係団体の努力があれば成功するだろうと確信しています。

ヤング 覚園寺が平和で静寂があることに強い印象を持ちました。中高生の発表を聞いて山稜部の役割に気付きました。山が都市のあり方のカギとなり、自然を利用して土地を形作ってきました。景観については計画が重要ですが、景観が計画に影響を与えたのではないという一面も知ることができました。山の緑も重要です。「顕著な普遍的価値」の存在を強く感じ、世界遺産になる潜在的な可能性があると思います。周囲の山々が持つ大きな利点と、鎌倉がどのようにその山々の中で存在しているかを推薦書でうまく伝えることが、今後の課題になるでしょう。

キング 第1回は一般情報に基づいて話をしましたが、今回はもっと具体的に鎌倉を理解し、鎌倉の状況がわかった上で話し合いができました。山と街の発展を合わせて考えるということが非常に重要な展開につなが

ると思います。たくさんの山のそばにお寺が残っていることは、本当に素晴らしい。最後の日には「サムライ文化とは何なのか」について話しました。サムライの文化はいわば全体の中の一つの部分ではないかと思っています。しかし学べば学ぶほど世界遺産に値するものではないかと思うようになりました。

●武家文化

稲葉 武家文化が世界遺産の価値の基礎をなすということは確かです。それにおいては世界遺産登録は成り立ちません。その上で推薦書原案作成委員会の先生方が十分に価値の中身を詰めてこられたと思います。誰もが分かっているはずの何かあるという大きな価値の総体を世界遺産にしていくなめには、それを具体的なものに託して表現していかななくてははいけません。海外からお出でになった専門家の方々は、寺や神社など宗教的な施設と政権との結びつきや、切通のような自然の地形をうまく使った都市というか、政権所在地の作り方について強い印象を持たれたようです。

西村 先ほどからコメントが続いていますが、周辺の山々の評価がすごく高いという評価が強く印象に残りました。大体どこの街も真ん中に大きな教会があり、その周辺に広場があります。宗教施設が核になって町が出来上がっていきますが、鎌倉の場合、鶴岡八幡宮がそれに当たります。

一つの文化をもつような仏教の一つの流れの中で、お寺がうまく地形に合わせてできあがっています。これをうまく説明できないといけないうので工夫が必要です。ここが全部大事だといればいいのだろうが、全部が文化財になっているわけではありません。武家文化とは何であって、それが今の日本の文化の基底にあると言っているが、それが一体何なのかというと考えてしまいます。鎌倉はお寺だけということと武家文化とどう関係があるのかと言われたら、またそこで説明しなくてははいけません。武家文化という非常に形のないものです。日本人のメンタリティーを形成しているようなルーツです。武家文化とかお寺のイメージを持っているので、自分たち自身がきちんと説明できるかと問い直して、論理を鍛えていくことが非常に大事だと感じています。

ヤング 実質的なこととして推薦書を書いていくときにほとんどの国の人たちは、サムライといえは分かるが、今まで両親や祖父が言ったこととか、映画で大きな刀を持って、人の首を切るとかいう意味だけです。